



本能の代弁者

2部4章



TK-0ne

はじめに

本書のテーマは”人”です。

最近では人間について色々な事が判ってきています。脳科学、心理学、社会学...人体について、人間の社会について...。でもそれは本当に”人”の本質についての事なのでしょうか？

皆さんは光の3原則を知っていますか？そう、赤、青、緑の三種類の光を白い壁に当てると真ん中が白くなる、というものです。実際には壁が白いために白く見えるだけで壁を照らしているのは透明な光、です。人の本質についても同じです。脳科学や心理学が赤や青の光とすると真ん中の透明な光・・・この中に人間の本質が隠されているのではないのでしょうか？しかし、透明であるから性質がつかみづらい・・・赤や青は色が付いているから調べようがあるのです。でも一番知りたい真ん中の透明な光・・・色の付いた部分の光の性質を知るだけでは永遠に判らないでしょう。でも、そこに光があることは皆が知っています。知ってはいるけど気づかない・・・それだけのことではないのでしょうか？今現在わかっていることをつなぎ合わせる事ができれば「人とは？」と言う命題に答える事ができるのではないか・・・いや、すでに我々はそれを知っているのではないか。ただ、知ってはいるけど気づいていないだけ。そんな気がするのです。

「総合人間学」と言う分野の学問が最近生まれたようです。大学の中でも総合人間学科を創設したところがありますし、総合人間学会というところも出来ました。「やっと人の本質について語る学問が出来たな...」そう思いました。しかし、実際に彼らがやっている事は真ん中・・・透明な光が何かではなく回りの色についての事では感じません。確かに科学の発展は周りの色の付いた部分を分析し解明してきていると思います。それだけでなく以前は見えてさえいなかった光、紫外線やら赤外線の部分も見えるようにもなっているのだと思います。物事をを細切れにしてその一つ一つについて分析する。そういった西洋科学のやり方はもちろん現在の科学の発展には大いに役に立ちました。でも人間について、いやそれだけでなく生命について・・・細切れにしては全体がわからなくなる分野は多く存在しているのではないのでしょうか。真ん中の透明な光の部分は未だに手付かずなのです。彼らのやっているような事ではなく、もっと皆がすでに知っている事にその本質があるのではないかと思うのです。しかし判っているけど気づけない。どうしたらそこに気づく事ができるのか...

想像の世界に入るしかないでしょうね。「想像」と言うと「なーんだ・・・単なる想像か」と思われるかもしれませんが、研究の分野ではこの想像を「仮説」などと呼んだりもします。「仮説」のほとんどは単なる想像が元になっているのです。そして、その「想像」の手助けとしてキーワードを並べてその事について書き連ねた物を並べ替えていく、という手法を使っています。「知っている」事を単に順番を並べ替えつなげてみる事で案外気づけない部分に気づくことがあるのです。話を元に戻します。人の本質とは・・・一番判りづらく考えるための手がかりも少ない心と精神に鍵がありそうです。心と精神は全ての人々が持っているのです。なのにそれが何かは判っていません。でも判らないのではなく気が付いていないだけでは有りませんか？

人の社会にも不思議に思えることはたくさんあります。人はいつから他の動物とは違うと思うようになったのでしょうか？人だけが特別・・・そんな事はありません。一人の人を他の動物と

比べるとそれ程能力に違いがあるとは思えません。それなのに人だけは特別だと思われています。人がなぜ自分達の事を特別だと思うようになったか……。それ以外にも人が住み着いた全ての地域で宗教が発生している事や人だけが持つ無限の所有権への欲望などなど……。それらを解明する事によって透明な光の部分をしづつでも理解できるようになれば、と考えて前著および本書を書きました。

前著「本能の代弁者」を書き終えたのは2010年10月なのでもうずいぶん時間がたっています。前著は今から読み返すと確定している説でもない物を言い切っていたり迷いながら書いた物がなぜか自信たっぷりだったり…。まあ、全体的な流れは私の考え通りなので良いのでしょう。今回も前回と同じで「私はこう考えている」と言うだけの話であってちゃんとした学説を基にしているわけではありません。おそらく本書も前著も細かい点では間違いだらけでしょう。でも細かい点にこだわるのではなく大きな視点で読んでいただければと思います。

前著は

人間もどうかすると数千年、数万年後には単に優雅なだけの生物になっているかもしれません。それも人間の選択次第なのでしょう。もしかしたら、そんな世界こそがヨーロッパの人々のいう天国、アジアの人々の言う極楽浄土なのかもしれません。

と言う文章で終わらせました。でも本当は2部4章につなげる予定だったのです。1部では脳の機能について、2部では人間の社会に対してを書きました。そして最後に2部4章として人間の社会はどうあるべきか、そして実際にはどのような方向に変わっていくのかについて私の考えを書くつもりだったのです。しかし当時はまだ書ききる事が出来ませんでした。考えをまとめる事が出来ずに結局あのような最後にしてしまったのです。あれから4年。ちょっとは頭の中が整理できてきました。それに前著は某出版社の懸賞に出す為にある程度の枚数、文字数が必要でした。でもここなら文字数は関係ありません。それこそ本一冊を1行ずつで出す事だって出来ます。なので今後も修正や追加を行う前提で今の所の考えをアップしたいと思います。

その前に前著を読まれていない方に若干の説明をしておきます。

まず一般的に言われている言葉の意味は幾つにも解釈できてしまうので幾つかを定義します。

本能：個体自身の持っている遺伝子の発現によってある行動に駆り立てる性質

心(自分で意識できる脳の活動)：脳の判断をする機能

精神：意識、無意識を含めた脳の活動

と定義します。「心」の解釈について詳しくは前著を読んでいただければと思います。とりあえず簡単に言うと、個体の行動は本能と経験によって影響を受けますが幾つかの本能、経験が相反する行動に駆り立てようとする場合に判断をする必要があります。その判断をする脳の機能が発

達した物が「心」と呼ばれる物ではないかと私は考えています。また、本書でもこの解釈で話を進めます。

「心」の起源（前著の訂正）

前著では人間の精神は他の動物と同じ、と書きました。基本的には「他の動物」とは哺乳類の事を指しています。そして「心」つまり脳の判断をする機能を持っているのは脊椎動物である、と考えていました。たとえば昆虫や軟体動物に人間と同じ心があるか、と考えると？だったわけです。でもその後その考え方は変わりました。

まず哺乳類と対比できる高等生物としてとりあえず昆虫と比較してみましょう。昆虫と哺乳類はずいぶん違います。たとえば呼吸をするのに哺乳類は肺で、昆虫は気門で行っています。物を見るのも哺乳類は目で、昆虫は複眼と単眼で行っています。どちらも構造はまったく違います。でも機能や目的は同じようなものですよね。それ以外でも構造は全く違っても同じ機能を持っていると思ってい事はたくさんあります。そもそも「五感」、つまり見る、聞く、感じる、嗅ぐ、味わうと言う「感覚」の部分は同じです。どちらも電波や放射能を感じる事はできない訳です。そして新鮮な空気(酸素の多い空気)を吸って汚れた空気(二酸化炭素の多い空気)を吐き出しています。体の構造はまったく違うのになんでそういった「体の機能」やそれぞれの器官の「能力」は同じなのでしょう？

そもそもどれも生物が単細胞生物だった頃から持っていた能力です。単細胞生物も光や振動を感じ、触覚を持ち、化学物質に対する知覚も持っていました。たった一つの細胞ですべてを行っていたわけです。その単細胞生物が多細胞になっていく過程でそれぞれの細胞が特定の機能に特化していったのです。

世の中に単細胞生物しか存在していなかった当時、単細胞生物はたった一つの細胞だけで進化できる限界まで進化を進めたと考えられます。たった一つの細胞で狩を行い捕食者から身を守り生殖すらしていたのです。現在の高等生物と同じ事を一つの細胞で行う・・・生物は単細胞生物だった頃にすでに現在の高等生物が持っている性質をすべて身に付けていました。その後より強く、より大きく、そしてより賢くなる為に生物は分裂の際に体を切り離さずに多細胞になる道に進化しました。そしてたんに多くの細胞が集まった多細胞生物から一部の細胞の機能を限定してより高機能な細胞を作るようになっていったのです。目は目として進化したのではなく光を感じる事以外の能力を捨てる事でより高機能な感覚器官となったのです。多細胞生物の各器官はそのようにして他の能力を捨てる事で一つの事に特化した器官になっていきました。

当然人間でも同じです。目や耳や足などは最初から目や耳として発達したのではなく、すべて行える細胞が他の機能を捨てて一つの機能に特化する、というところからスタートしたのです。生まれた時は哺乳類も昆虫もいまだに同じ事を繰り返しています。すべての高等生物は「受精卵」と言う単細胞生物から発生しています。受精卵は1個の細胞でできていて、それが分割して多細胞になる。この時点ではどの細胞もすべての臓器になりえる能力を持っています。それが部位によって他の臓器になる能力を捨てていく事で特定の能力を持った臓器になっていくのです。

では、心や精神の部分はどうでしょうか？単細胞生物にも本能や学習能力はあります。と言う事は相反する本能や経験を状況によって「判断」する必要があるはずですが。要するに「脳の判断をする機能」である心を持っているということになるのではないのでしょうか。そして単細胞生物だっ

た頃の能力はその後進化した先の生物にも受け継がれているでしょう。昆虫や軟体動物といった人間とはまるで体の構造が違う生物も人間とはまったく違った構造かもしれない「心」を持っていると思われるのです。

民の時代（前著の訂正）

前著では現在を「個人の時代」と呼んでいました。これは間違いではないと思いますが、今後を含めた「支配者の時代」に続く時代と言う考え方からするとちょっと違います。なので現在を「民の時代」（たみのじだい）と呼ぶことにしました。詳しくは2部4章に書きます。

2部4章

現在の人間の社会は数千年続いた支配者の時代から「民」の時代に移ってまだ2～3百年、と言ったところでしょうか。しかし民の時代はまだまだ完成していません。完成まで今後数千年の時を必要としています。しかしそれまでの間も時には大きく、時には逆行しながら完成形を模索していくこととなります。その完成形を今現在完璧に予想することは誰にもできません。しかし今後数十年の予測程度であればある程度の事は予測可能です。

1.経済1 ***国家の債務***

封建的な社会から現在の民主主義になるきっかけを作ったのはなんだったのでしょうか。先進諸国の工業化によって誰かに支配されることのない一般市民が増えたことは大きな下地を作りました。しかしそれだけでは国を支配する支配者が没落することはなかったでしょう。国の支配者を直接的に没落させたのは革命や戦争です。フランス革命やソビエト革命、ヨーロッパの30年戦争から第二次世界大戦まで。その戦火が国の支配者を変える直接的な引き金になったのです。しかし、国の支配者は没落しましたが社会全体ではまだまだ支配者の階級に属する人たちは多く残っています。その支配の構図はそう遠くない時期に崩壊するでしょう。では、今後起こる「支配者の時代の崩壊」はどこでどのように起こるのでしょうか。「民の時代」の勃興期のように戦争や革命が起きるのでしょうか？戦争や革命は今後もなくなりはいらないでしょう。しかし第二次世界大戦のような広範囲に及ぶ全面戦争はおそらくもうないと思われまます。世界の大国にはそれを行えるだけの資金力がすでになくなっていきます。もちろん第二次世界大戦の頃だって戦争の資金を調達するのは大変でした。でも現在の戦争は当時と比べてものすごく高くなっているんです。それに国民の同意も得ることは難しいでしょう。それと同時に先進国のトップは全面戦争の責任を負う事が出来なくなりつつあります。それでも人類の歴史を見ると社会が変わる時というのはその前の社会が壊されるような大きな事件があった時です。では何によって現在の社会は壊されるのでしょうか。今の時点で世界をガラリと変えてしまう可能性があるのが「経済」です。

では世界経済の現状を見てみましょう。世界全体の金融資産は現在軽く200兆ドルを超えています。それに対してGDPの総額は40兆ドルほど。でもGDPには裏世界、麻薬や密輸、売春といったアングラマネーは普通含まれていません。なので実際の世界の経済規模はもうちょっと多くなります。それでも現状の金融資産は世界の経済規模の3倍以上あるのではないのでしょうか。これはもちろん国が、とか民間が、という話ではなく全体で、の話です。全体が使っている金額の数倍の金融資産があるのです。これは金融資産の総額であって不動産や貴金属などの実物資産は計算に入っていません。金融資産というものは預金や債券、株式などのことなので、裏をかえればそれだけ借金をしている人たちがいるという事でもあります。しかも全体でこの状況になるという事はたとえば半分の人たちがお金を貸して半分が借金をしたとしたら借金をしている半分の人たちはさらに倍の借金をしている、という事になってしまうのです。なぜこんな状況が生まれたのでしょうか？そして、それだけの借金はいったい誰がしているのでしょうか。実際に借金をしているのは国や自治体、企業、個人といった面々です。こんな状況はどうして生まれたのでしょうか。

国が国債を1兆円を発行して民間がそれを買ったとします。これは1兆円が民間から国に移ったと言うことです。わざわざ借金をして使わない人はいません。なので国はその1兆円を使ってしまふからその1兆円は民間に戻ります。そのお金で民間が国債を買う事で国に資金が戻り、国がそれを使って民間に1兆円をはらう・・・これを繰り返したから国の借金は膨大な金額になり民間の金融資産も同時に大きく膨らみました。本来は最初の1兆の国債を発行した時点で税率を上げて民間

から1兆円を吸収しなければいけなかった。そもそも国債を発行して公共部門が使うと言うことは民間の資金を国が吸収して公共部門が使う、と言うことでもあります。資金自体の量は変わらないのでやり方さえ間違えなければ国債発行ではなく税金によって民間の資金を吸収する事で対応しても景気に対してはどちらも同じだったはずです。ただ、確かに民間に資金があっても使われずに退蔵されたら景気は良くなりません。民間に任せていたら貨幣の流通速度を上げることができないと判断した場合に公共事業を行う事で貨幣の流通速度を上げて景気を良くしたかった。

でも、そのために税金を上げると景気が悪くなる、などという安易な考えを続けてしまっているのです。現状の経済の仕組み、あるいは運営の仕方は根本的に間違っているのでしょうか。このことによって国は膨大な金額の金融資産を民間に提供してしまいました。今、日本の個人金融資産は1433兆円あると言われていています。だけどそのうちの1000兆円以上は単に国が民間に配っただけのもので、本来は最終的に配った金融資産を回収しなければならないはずなんです。

では、国はどうやってばらまいた金融資産を回収しようとしてるのでしょうか。お粗末なことに消費税等の増税で資金を集める事で賄おうとしてるのです。国がばらまいた金融資産はどこにありますか？あなたの手元にあるんですか？もちろん国債という形ではなくても預金や年金、健康保険といった金融商品も裏を返せばかなりの部分が国債です。なのでみんなが相当な金額の国債を所有していると思っていいとは思いますが、それでも金融資産の所有は相当に偏りがあります。ま、日本以外の先進各国ほどではありませんが・・・。元々国がばらまいた金融資産の回収の為にあれば偏って持っている所から重点的に回収する必要がありますが、その方法が消費税・・・。大地と湖があって国の役目が雨の降らない時期に湖から大地に水を撒くことだとすると真逆の事をやっています。消費税の増税は乾いた大地から水を吸い上げて湖に流し込むことです。これは日本だけではなくアメリカを筆頭に世界中がはまり込んでいる状態だと思っていいのではないのでしょうか。このままだと世界は砂漠とほんの一部のオアシスに分かれてしまう事になりかねません。そうなる前に暴動などで社会が破壊される可能性もあります。世界中で暴動は増えてるようですが無関係ではないと思います。

この解決策は一つだけだと思います。堂免信義氏が主張している方法で（参照：日本を滅ぼす経済学の錯覚 光文社）相続税として金融資産を国が回収する方法です。誰かが亡くなった場合亡くなった時点で金融資産は相続税として他の資産より高い比率で徴収するのです。もともと相続できるだけの金融資産をため込むことができたのは国の政策による所が大きいですし当然すべての人がインフラを使って生活をしているのです。一人の人間として一生使わせてもらったインフラの代償を亡くなった時点で国が回収する。まったくおかしい論理ではないと思います。それが嫌で生きている間に富裕層が金融資産を使うようになれば景気が良くなる要因にもなります。ただ、こういう政策は富裕層に評判が悪い点がネックとなります。金持ちほど国外に逃げる方法を持っています。今まで国が作り上げたインフラで生活し国の政策のおかげで大きい金融資産を積み上げることができた。それを税金が安い国に持ち出すわけです。これを防ぐには全世界で取決めを行う等の方法が必要ですがおそらくそんなものはできません。日本だけでなく世界中の国が行きつくところまで行くことになるんでしょうね。日本の場合は国の借金によってできた資金は日本国内からほとんど出て行ってません。なので国が借金した分だけ民間に国債を買う資金が

できるので破綻なんてしないでしょ。でも世界の国の中には違った状況の国がたくさんあります。それらの国が破たんをし始めれば破綻の波は世界の経済を破綻に追い込み、これが社会自体も破壊することになる可能性は相当高いと思います。

2.経済2 ***国内途上国***

世界の経済ではもう一つ、社会を大きく変えてしまう現象が進行中です。それが「グローバル経済」です。

まず「経済」とは何を指すかもう一度確認しておきましょう。経済とはお金—貨幣を中心とした人間の活動を指します。ではお金—貨幣とは何なのでしょう？

貨幣はもともと人間の社会の分業を高度化、効率化するために生まれました。私にはできないことがあります。私にできることもあります。私にできないことを誰かにやってもらい、その代わりに誰かのために働く・・・社会の分業とはそんな感じですよ。その分業を効率的に仲介するのが貨幣の一番重要な役割です。自分の行った「仕事」と他の人の行った「仕事」を効率よく結びつけるのがお金の代替価値としての役割、ということです。貨幣の役割がそうであるなら経済とはその貨幣の役割—社会の分業の効率化を促進するための社会の構造や社会の運営方法の事であると私は考えます。「社会の分業の効率化」、つまりできるだけ多くの人が自分に合った仕事をを行い、その結果として生活を豊かにすること。これが経済活動の目的であり経済の役割なのです。

今現在の「社会の分業」はほぼ最終段階と思ってもいいグローバル経済の世界になってきています。社会はグローバル経済によって国の垣根を越えて分業を行うようになってきているのです。しかしこの「グローバル経済」はすべての人に福音をもたらすわけではありません。というよりも先進国では大勢の人に過酷な「競争」を強いることになります。今までは「国境」が高い壁となってその内側、国内の人たちを守っていました。でもグローバル経済はその壁を壊し始めているのです。今までは仕事の成果を国内の他の人たちと競えば良い環境でした。それが国内だけではなく海外、それも所得水準が全く違う地域の人たちとも競争しなければならなくなったのです。農業協定などで「関税撤廃反対！」なんて言うのがよくありますよね。これも同じことです。でも企業で仕事をする人たちにとっては反対する機会も与えられずに海外に仕事を持っていかれるのです。海外に持っていかれたくなければ海外と同じ価格で仕事をこなさなければならない・・・結局はこれが格差問題です。

「格差問題」は政治の世界でも問題になっています。でもこの「格差問題」という言葉、私には違和感がありますね。実際にはどういうことか・・・国内でしかできない仕事は「先進国水準」の所得水準を保ち、海外でも同じ仕事ができる場合は「途上国水準」の所得水準になる。そういうことです。今までは「国境」、つまり国の壁が「途上国水準」になってしまうのを防いでいました。その国の壁をグローバル経済が壊し始めているのです。最終的にはすべての先進国で国内にほんの一部の「先進国水準」の国民と大多数の「途上国水準」の国民が共存する形になるでしょう。なのでこの問題は「国内途上国」問題なんです。人数の上では「途上国水準」の人たちが圧倒的に多くなるはずですが。今までは曲がりなりにも先進国の人たちは先進国水準の所得を持ち先進国水準の生活を送ってきています。その生活水準を維持できなくなる人たちが増えると一つの国の中に先進国と途上国が同時に共生する形になる、と言った状態になります。そうになると現状の民主主義は成り立たなくなります。現状の民主主義は国民の間の格差が比較的少ない状態だ

からこそ機能していました。しかし、ただでさえ国家の債務は膨張を続けています。この状態で格差が一定以上に広がると圧倒的に数の多い「途上国水準」の人たちを国は守ることができなくなると思われるのです。

3.人間の権利と義務

人間は本来弱い生物です。そんなはずはないという人がいるのであれば、試しに文明の利器を使わずに大自然の中に入ってみてください。無人の島でも人のいない山の中でもいいです。そこで何日生きることができるでしょうか。同じ条件であなたが飼っている犬や猫ならいつまでも生きていけることができるかもしれません。でもあなたにはせいぜい数週間といったところではないでしょうか。あなたは非常に弱い人間という生物でしかないのです。そんなか弱い生物でしかないわりに、なぜか非常に傲慢になっているのではないのでしょうか。

特に先進国の人間は生まれながらにしていろいろな権利を持っているように感じている人が多いようです。しかし権利は義務や責任と常に裏腹の関係です。あなたは自分の持っている、あるいは持っていると感じている権利に対する責任が何かを考えたことはありますか？私には現在の先進国の人々の言う権利につりあうような義務や責任を個人が取ることはできないと思うのです。ということは権利があるように感じているのは幻想ではないですか？国や自治体が個人の権利を守ってくれるというのは行き過ぎた行政サービスではないのでしょうか？民主主義の政治はここでもばら撒きを行っているだけなのです。そのばら撒きに慣れた人達はいつの間にか義務も責任も考えずに権利だけを主張するようになってしまっています。もともと「お上」が民衆を守る、という考え方は支配者の時代の考え方です。支配している者たちを守るのは支配者の役目でその代わりに民衆は支配者のために働いたのです。でも「民」は支配者の為には働かず自分の為には働くようになりまし。支配者がいなくなった世界では「お上が民を守る」という義務も薄れていくはず。民の時代では国は権限をどんどん失っていきます。国の首相や大統領でさえ今よりもずっと権限のないただの調整役になっていくのです。そんな国にはもうあなたに権利をばら撒き続けることはできないでしょう。

そもそも最初から国は民を養う義務を負っているのでしょうか？人間の社会に共同体が出来た後、支配者の時代に共同体は範囲を広げて国に変わって行きました。「国家」という枠組みも支配者の時代に生まれた物なのです。支配者の時代には国を守るのは支配者の役目でした。そして国を守る為に支配者は民も同時に守っていたのです。では民の時代は？支配者に取って代わった民は国に守ってもらうのが当然なのですか？民は国に守られるのではなく国を守る存在にならなければならないのではないのですか？民が国に守られると言うのは逆なのです。実際に国が民を守る形は近い将来変わるようになるでしょう。今後、ひとつの国の中に「先進国水準」の民と「途上国水準」の民が共生する状態になると国が民の権利を同じように保障することは難しくなります。具体的に言うと基本的人権を見直す事が必要になるはず。これは遠い未来の話ではありません。おそらくこれを読んでいるあなたが生きていううちに起こる事になるのではないのでしょうか。

まさかあなたは現在の基本的人権というものを当たり前と考えていないませんか？考えてみてください。基本的人権が「民の時代」の民主主義によって作り上げられたと思うならそれも間違いです。基本的人権こそ支配者の時代を代表する考え方ではないのですか？生命を守ってやるから俺に尽くせ！と言う考えがもともとの基本的人権の考え方を作り上げたのです。そういった考え方

が出来た時代の支配者は支配する土地に住む人達を守る必要がありました。そうしないと支配をした土地の人々がどんどん出て行ってしまふからです。いくら土地を手に入れても誰も住まない土地では支配する意味がありません。だから人々の生命を守り生活を保障したのです。そうした事が後の世の中で一人歩きをしているだけです。「一人の命は地球より重い」などと言う妄想まで飛び出す始末です。人の命の価値は人以外の生物の命の価値と変わりません。なぜなら人間はその他の生物と種類が違うという違いだけでしかないからです。

ただし、政治家がこれを主導する事は出来ません。現在の民主主義ではこんな不人気な政策を掲げたって選挙で勝てないからです。結果として国は個人を助ける為に全体を潰す事になるでしょう。もうちょっと具体的に言うと福祉の膨張を止めることが出来ずに多くの国が破綻する事になるのではないかと思います。でも国は破綻をしてもなくなるわけでは有りません。個人への権利のばら撒きはそれが出来なくなった後で現状に合わせる形で縮小されていく事になるはずで

。

4.群れ

遠い昔、人間の社会がまだ狩猟採集を行っていた時代、人間はどのように自分の身を守ったのでしょうか。人間にとって自然は驚異でした。また、人々は自分がとても弱い存在である事を知っていました。だから群れを作っていたのです。弱い自分を守るには群れを作って仲間と助け合うしかなかったのです。

ではこれから先、あなたの脅威になるのは何でしょうか。自然は時に驚異になります。ですが時として大暴れする大自然は人類の脅威というほどではなくなっています。それよりも何よりもあなたの脅威になるのは人間の社会ではないでしょうか。個々の人間が国からの保護を離れた瞬間に社会はあなたの脅威としての存在に変わるのです。

それに対して個々の人間はどのように対処をすればいいのでしょうか。近い将来、大きく変わると思われるのが人間の「群れ」の形と思われます。「群れ」と言われてもぴんと来ませんか？まずはあなたの家族です。あなたにとって一番大切なはずの家族が群れの基本となります。でも、「家族」の考え方自体も変わっていくでしょう。そして自治体なども大きく姿を変えるでしょう。現在の「群れ」の形は支配者の時代に形作られたままになっています。列強によって強制的に国境を引かれたアフリカや中東などの様に支配者の都合で引かれた線によって自治体はできています。家族の形も一夫一婦制という支配者の時代の宗教が作り出した形態を引き継いでいます。本来の人間の本能から外れた制度を強制されているのです。

ではどういう形が変わっていくのでしょうか。まずは自治体から行きます。現在の自治体の線引き、納得してる人なんているのでしょうか。私が東京に住んでいた頃住んでいたのは練馬区、仕事をするのは杉並区、飲みに行くのは豊島区や新宿区、買い物などはほとんど埼玉県の新座市か戸田市。私はたばこを吸いますがたばこ税として国税と地方税を取られています。この地方税はどうなっているのでしょうか。私の場合活動のほとんどが練馬区以外なのに自治体の選挙で参加できるのは東京都と練馬区だけです。それに自治体によってごみの出し方から条例まで違います。なんでそんなものに合わせなければいけないのでしょうか。はっきり言って今現在の自治体の線引きは人の移動距離の少なかった大昔に有効だっただけの過去の遺物です。案外調べてみると海外でも同じような状況のようです。これだけ電子の世界が発達した現在、こんな線引きを後生大事に使っているなんてのは国を動かしている人たちが何も考えてないか自分の選挙区がなくなる事を嫌がってるだけではないですか？自治体と言いながら本当に「自治」の必要性を感じているのはどの程度でしょうね。一部の離島や陸の孤島には必要かもしれませんが、それ以外ではもっと大きな線を描くことを考えないといけません。もうピラミッドの構成にする必要なんてないんです。日本の場合だと道州制でその下に一段階自治体があれば十分です。

そして、その自治体も住んでる場所で勝手に決められるなんてのはもう通用しなくなります。自治体は自分で選ぶ形になるって事です。勝手に引かれた線の中の人々が「あなたは個々の自治区の人間なので協力しなさい」って事をやっているから自治なんて形だけ、名前だけになってしまうんです。自治体を自分で選べるようにならなければ自治体の長だって自治体のために何をやらな

ければならないのかははっきりしません。それがはっきりしないから日本の政治家みたいな連中しか選挙に出なくなっていくのです。自治体を自分で選べるようになると趣味や生き方、考え方が合っている人たちが集まるようになっていきます。現在の政党と一緒にですね。そして自治体のトップになった人はその自治体の人たちの意見を代表する事で政治と繋がるようになります。そうやって初めてトップになった人は現在よりもっと民主主義をちゃんとやれるようになるのではないのでしょうか。現在の政治家を悪く書きましたが現在の政治家は八方美人にならざるお終えません。そんな所で労力使っているのは本来の彼らの仕事なんて出来っこないんです。

自治体はその程度ですが家族の形はもっと大きく変わることになります。現在の先進国の「家族」は基本が一夫一婦制にあります。でもこれって歴史の中ではごく最近の話です。キリスト教が一夫一婦制だった事が大きく影響したようです。一夫一婦制は人間の家族の形として本当に優れていると思いますか？もしすぐれているのであれば現在の様に離婚が多いのはなぜですか？離婚はしていないけど我慢しているだけって人たちまで含めると結婚している人たちの中で本当に幸せをつかんでいると言える人の比率ってどんなものなのでしょうね。もちろんカップルは今後も存在するでしょう。でもそれは現在のように「いったん結婚したら基本的には生涯を共にする」と言った形ではなくなるのではないかと思います。そうすると子供を育てる間、またはその最中にカップルが変わる、ということも頻繁に起きるようになるでしょう。いや、昔からそういったことは多かったはずですが、でも結婚していると言う前提があるし子供もいるし・・・、といった形でカップルのどちらかが、あるいは両方が我慢する事で「結婚」を維持していました。結婚を維持するため、という理由で自身の生涯を犠牲にするのが当たり前だったのです。よく考えるとこういった形で「家族」を構成すると言うのももしかしたら「支配者」が共同体全体の管理をしやすいとする為だったのかもしれない。また、共同体を安定した組織にする為にも必要だったのでしょう。もともと人間の男女の「恋」は賞味期限付きだと言われています。「恋」は相手を盲目的に好きになる状態で適齢期前後になりやすく平均的には4~5年位続くようです。これがカップル成立の条件になっているだけです。大昔には子供は小さい頃から共同体の中で自分の仕事を持っていましたし、現在よりもずっと小さなころから働いていました。なので自分たちの子供が両親がそろって面倒を見る必要がある期間が「恋」の賞味期限だったわけす。一生を添い遂げるなんて言う本能は人間にはありません。現在では子供を育てるのが大昔よりずっと長くかかるのもうちょっと「恋」の賞味期限も長くなっているかもしれませんが・・・。どちらにしても一夫一婦制は人間の本能から外れた強制だと思われるのです。

一夫一婦制が崩れると家族の形はどう変わっていくのでしょうか。ズバリ言うなら「多夫多婦制」になるんじゃないかと思っています。えっ？答えが簡単すぎるって？別に何も考えないで一夫一婦制の逆を言ったわけではありません。人間の本能は多夫多婦制の方が合っていると思うからなんです。一旦カップルになった二人を一生連れ添わなければならない。いやなら離婚しなさい。これが現在の法律です。人間のカップルは本来もっとゆるい関係だと思っんです。ゆるい関係なのに強制的に夫婦として暮らしていかなければならない。これが一番大きな離婚の理由になっているのではないのでしょうか。もっとゆるい関係で何人かの中でいれば別れなくても済む場合は多い

んじゃないですか？趣味や志、考え方の合った仲のいい数人の男女が「家族」として生きていく。当然その中のカップルが生んだ子供も「家族」の一員として、また親もその中に含まれる場合があるでしょう。多夫多婦制の家族の中でいったんカップルを解消したんだけどまた復活、なんていうことだってあるかもしれません。また、ひと昔前までは一夫多妻制が多かった時代がありました。それは経済力が男に偏っていたからです。これからは男だけでなく女も経済力に優れた人が増えるでしょうから数人の男と一人の女性、なんていう組み合わせもできるでしょう。男だけ、女だけといった家族も生まれるかもしれません。カップルを解消した片割れや成人した子供はその家族に残ってもいいし他のグループにうつってもいい。そうなれば自分が何をやりたか、どんな仲間が必要なのか、そういったことを真剣に考えるようになります。そうなれば人と人の繋がりを現在よりもっと大切に思うようになるのではないのでしょうか。

多夫多婦制には人間の本能以外にもメリットがあります。あなたの脅威になる「社会」に対しては「群れ」を作って対抗するしかありません。一夫一婦制の家族では社会に対抗する「群れ」としては規模が小さすぎるのです。それに大きな家に大人数で住めば経済的に有利になりますし子供の世話や教育にもいろいろな大人が家族にいる事はメリットになります。現在の一夫一婦制では離婚をすると子供や親をどうするか等の問題が出てきます。国がある程度生活の保障をしてくれていた間はどうかはなっていました。今後、このままでは悲惨な子供、悲惨な老人が増えるだけです。それに自治体も現在の自治体の様に何やってるかわけわかんない自治体ではなくなっているはずなのでその中の順位を上げることもなるのです。

こういう社会になれば政策としても金融資産を除いた財産、家などの不動産や車、耐久消費財などは「家族名義」あるいは「共同名義」を可能する形に移行すると思います。そうなれば経済的な結びつきはもっと強くなります。由緒ある旧家を相続税のために更地にしてちっちゃな分譲住宅をいっぱい建てる、なんてのを法律で押し進めるのは自分の国の文化に興味のないアホ役人しか思いつかないことです。そういった事も無くしていく事が出来るようになるんじゃないですかね？。

もともと人間の「群れ」はそうしてきたはず。それが支配者の時代に今の形になった訳です。でもそれは個々の人の本当の幸せを追求したわけではない。しかもそれを強制している「国」に強制の力がなくなって行きます。たぶん自然にそういう形になってあとから追認、というお決まりのコースでそうなるのではないのでしょうか。

5.社会のルール（予告）

良い社会とはどんな社会でしょうか？世の中には色々な社会があります。日本のように「和」を大切にする社会もあればアメリカのように競争やディベートが重要な社会もあります。物を盗む事が日本ではやった人が悪い、ということになりますが盗まれる方が悪い、ということになってしまう社会もあります。では、そういった社会ごとの「質」はどういった要素で決まるのでしょうか？それを決めているのは「社会のルール」です。法律だけではなく道徳や風習、単なる「常識」と思われていること...それらを含めた総合的な「社会のルール」が人間の社会の質を決めているのです。それだけではなくその社会に暮らす人たちの考え方や行動にも大きな影響を与えています・・・。

っと言った事をそのうちまとめてアップしようかと思います。私のそのうち、ですから3年後か5年後か・・・。